

リレー随筆

「そこに曲がり角があったら、曲がればいいんですよ」

済生会川内病院 消化器内科 豊留孝史郎

ちゃんと仕事をして、ちゃんとお金を稼いで生活していくことは、本当に大変だな、と最近しみじみ思う。あーあ、親父がベッカムだったらよかったのにな。

ところで、私は昔の思い出に浸ることがとても好きです。あの頃は楽しかったな、あの思い出は今になって思い出しても最高だな。そんな思い出にふけることがよくあります。特に、多くの笑いが起きた時の思い出やエピソードは別格であり、決して忘れないようにしています。

皆様は、日々生活している中で心の底から笑った思い出はあるでしょうか。今回、いわゆる随筆文とはひどくかけ離れた文章構成となっていますが、私がこれまでの人生で経験した面白かったエピソードを、この場を借りてご紹介したいと存じます。思わずクスッと笑っちゃうような、あたたかく、ゆるーい感じでご覧いただけますと幸いです。

エピソード ～大切な物～

学生の頃、体育会系の部活に所属していた私は、その日行われた試合で勝利し、チームはリーグ戦の優勝を決めた。その日は優勝が決まったということもあり、祝勝会もかねて皆で飲み会をしたのであった。その事件が起きたのは、ある程度時間も経ち、みんな程よく酔いも回って来ている頃だった。当時の部活の中心メンバーだった、とある先輩がお酒を飲みすぎてしまったのか、トイレの中にこもりっきりになってしまった。

私「先輩！大丈夫ですか？」

扉をノックすると、鍵が開いていた。心配になった心優しい後輩である私は、中を覗い

てみたところ、その先輩は完全にお酒に吞まれており、便器にしがみつくような態勢になっていたが、なんとか存命であった。

先輩「すまんすまん、心配かけたわー。もう行けるから大丈夫。」

その際、言わずもがな便器の中が色々大変なことになっており、その先輩の手も言わずもがな大変汚れているようであった。そのままじゃ見てもおれなかったので、ひとまず私は水洗トイレのレバーを押して流そうとした。

私「先輩、大丈夫ですか？先輩は手がちょっと汚れちゃってるようですので、僕が代わりにトイレ流しときますからね。」

ジャー……。先輩に気を使い、私がトイレを流した音がしたその瞬間、私は衝撃の光景を目の当たりにする。

先輩「いや、ちょっと待てよ！」

とキムタクばりに叫び出した先輩は、突然便器の中めがけて手を突っ込み、便器内を手で探り始めたのであった。ただでさえ汚いその手から腕までをぐしょぐしょにしながら、夢中で便器の中に手を突っ込むという常軌を逸した行動に、私は非常に混乱し何が起こったのかわからなくなってしまった。一体全体、何故その先輩は、こともあろうか何の躊躇もなく便器の中へ手を勢いよく差し込んだのだろうか。お酒を飲みすぎて大事なネジが外れて、どこか狂ってしまったのではなからうか。

話はその2週間前の週末に遡る。私達の部活は、ほぼ毎週末ごとに試合を行っていたが、その日は非常に緊迫した試合展開であった。「ザ思わず便器に手を差し込んだ先輩」が試合に途中出場してきた際、その便器先輩は相手選手との接触で顔面を強く打ってしまった。

その際、便器先輩は「歯が,,, 歯が,,,」と言いだめた。なんと、便器先輩は相手との接触で前歯を折ってしまったのだ。試合は一時中断となり、便器先輩はそのまま歯科クリニックへと運ばれた。そのガッツあふれるプレーに感化され、私達のチームは見事にその日の試合に勝利し、その後の優勝および祝勝会へとつながったのであった。

そう。その試合以降、先輩は折れた前歯を一時的に補うために「差し歯」で対応していた。私がトイレを流した瞬間、それと同時に便器の中に前歯の「差し歯」がとれて落ちてしまったため、それを取り戻そうと必死に手を便器の中へ突っ込んだのであった。先輩としては、「なんでこの後輩は勝手にトイレを流したんだ。俺の差し歯がはからずも落ちたから、拾おうとした時だったっていうのに。」という気持ちであろうが、そんなこと全く存じ上げなかった私としては、「大変なことになってしまっている便器の中に突然手を突っ込むなんて、この先輩は急に頭がおかしくなってしまったのではなからうか？」という気持ちであり、両者の中でまさしく恋愛ドラマのようなすれ違いが起きてしまったのであった。その後、事情をお互いに理解しあった私達であったが、何の躊躇もなく手を差し込んだ先輩の勇気に敬意を表し、この話はいまだに私達の間では語り草のようになっている。

それにしても冷静に考えてみて、一度便器の中に落ちてしまった差し歯を、もう一度洗って再利用するものなのであろうか。この点は非常に意見が分かれるところかもしれない、controversialな点なのかもしれない。

エピソード ~あるあるネタ~

続いて私が学生の頃の話。同じ部活の先輩と後輩と共に定食屋で夕食を楽しんでいた。オーダーも済ませ、皆が団らんとしている時、話好きな先輩がとある話をし始めた。

先輩「あのさ、突然、しゃべったことも仲良くもなかった人に、思いもかけずに話しか

けられることってあると思わない？俺は結構あるんだけど、みんなはどう思う？」

という、なんとも言えないあるあるネタを放り込んできたのであった。一体どんなエピソードなのだろうか。無視して次の話題に行くのもしのびないな、と思った私。

私「先輩、それは一体どういう話ですか？」

先輩「あのね、みんな知っていると思うんだけど、童謡で『ぶんぶんぶん』ってあるじゃん？」

と、その先輩は「ぶんぶんぶん、ハチがとぶ」というあの有名な童謡の話をし始めたのだった。

先輩「その当時俺小学校の低学年でさ、意味不明な笑いのツボに自分でひっかかって笑っちゃうところがあったさ。」

そんなことあるか？と心の底で思いながらも、ひとりの後輩として話を合わせることにする。

私「あーなるほど、そういうのってたまにありましたよね。何なら今でもあったりしますよ。」

先輩「そうそう。で、その当時の俺、ぶんぶんぶんの曲の音程に合わせて、『ぶんぶんぶん、カナブン。』って歌って自分で勝手に曲を終わらせちゃうのが、なんかよくわかんないけどすげー面白くて笑いのツボに入っちゃってたわけよ！」

と話し始めたのであった。まず、この先輩は本当にどうでもいようなことで楽しんで幼少期時代を過ごしていたんだなー。相当アホだったんだろうなー。ということや、それにしても小学生にしてこの秀逸なボケを一人で考えたのかと思うと、それもそれで偉大なことなのではないか、いやいや、でも教室でひとりスベっていたのは間違いはないはず、そもそも友達はいたのだろうか？うーむ、悩ましい。

と、いろいろないろいろな思いが交錯してしまい、先輩の話のその後のオチを聞かずして、その音程とフレーズが私のツボに入った

こともあり、定食屋で涙を流しながら腹をかかえて笑ってしまった記憶がある。この点に関しては、文章では非常に伝わりにくい音程的な部分もあるのであまり共感が得られないかもしれない、大変申し訳なく思う次第です。

ちなみにその後の先輩の話のオチとしては先輩「それがさー、その後もさ、『ぶんぶんぶんカナブン。・・・すぐ終わっちゃったよ！』ってな感じでひとりで何度も何度もノリ突っ込みやってたらさ、全然仲良くなってしゃべったこともなかった同じ教室の男の子に突然さ、『あのさあのさ、ぶんぶんぶんカナブン。も結構いいかもしれないけど、そのパターンでいくと、ぶんぶんぶん新聞。もいけちゃうやつだよね！』って感じで突然しゃべりかけられちゃってさー。いやー、当時は小学生ながら、突然でびっくりして参ったよほんとに！」

というあるあるネタだったらしい。

エピソード ~ Something White ~

私がまだ中学生くらいの頃、私はよく母と共に母の実家に行くことがあった。母の実家に行くと、祖父・祖母が出迎えてくれるわけであり、とても楽しく過ごした記憶がある。そんなある日、祖父を連れて母は車でどこかへ数時間お出かけに行ってしまった。そこで、家には祖母と私の2人が残されている状況となったわけである。その頃は腹が減ったら時間に関係なく早いところご飯が食べたい、というわがままな私の面があり、その時も案の定、昼の3時くらいであったと思うが、腹がすいたのでご飯を食べたい、自分は料理が全くできないから何か作って食べさせておくれ！と母の代わりに祖母へお願いをしたのであった。祖母も急なお願いに困惑したであろうが

祖母「今はね、冷凍の白ご飯しかないのよ。お母さんがスーパーに寄って帰ってくると思うから、もうちょっと待ちなさいね。」

というような至極まっとうなことを言うわけである。しかしながら、聞き分けの悪い思

春期真ただ中であつた私は

私(中学生)「えーお腹減ったわー、何かないわけー？」

となるわけである。そこでカチンときたのか、その後の祖母の対応は、今思うとある意味でホラーだったな、と思えるわけである。祖母はおもむろに何かを悟ったかのような様子で、突然冷凍ご飯を電子レンジで解凍し

祖母「じゃあこれでも食べなさいな。」

と言って茶碗一杯小盛の白ご飯を出してきたのである。白米のみである。There's only white rice.

私(中学生)「いや、ばーちゃん、ちょっと待ってくれよ、おかず忘れちゃってるよ！さすがにおかずが何もないと俺も白米だけじゃ厳しいわ！」

と文句をたれたのであった。そうすると何を思ったのか、祖母は冷蔵庫よりおもむろに何か白いものを取り出し、白米の横に並べた。

そう、それはブルガリアヨーグルトであった。

エピソード

～伝説のキャラメル・フラペチーノ～

私は鹿児島島の私立高校に自宅から自転車で通学していた。私の通っていた高校の生徒は、鹿児島県内出身者と県外出身者とで約半分ずつを占めており、私の数少ない友人の中でも、県外出身の友人が何人かおり、県外出身の友人達は大抵、下宿先から高校へ自転車で通っていた。そんな中、とある関西出身の友人の一人で、当時まだスマートフォンもない世の中で、妙に情報通な奴がいた。その友人が、ある平日の授業の合間の休み時間に私のもとを訪れて話し始めた。

友人「おい！鹿児島中央駅に、ついにスタバができるらしいぞ、今度行こうぜ！」

と、謎に女子高生のような情報を持ってきたのだ。 (ちなみに我が母校は生粋の男子校である。) 今となってはあまりにも無知なのかもしれないが、そもそもスタバをその当時全く存じ上げなかった私。

私「なに、すたばって？面白いん？」

となるわけであるが、その友人は

友人「お前スタバ知らないの？それはマジで色々終わってるわ！勉強する暇あるならキャラメル・フラペチーノでも飲み行ってこいよ、マジで半端なくうまいから！」

という都会っ子アピールで私のマウントをとってくるわけである。わかった、わかったと。じゃあ今度の日曜日に、鹿児島中央駅のアミュプラザで映画でもみてから、スタバとやらに寄ってそのキャラメル・フラペチーノを飲んで帰ろう、となったわけである。

と、いうわけで、とある週末にその友人と共に、お昼過ぎから鹿児島中央駅はアミュプラザへ自転車映画鑑賞に行ったのであった。その時見た映画はホラー系であったが、急な怖いシーンとかで思わず体がビクッ！となってしまう度に、後ろの女子高生たちが座っている席から、我々の頭にポップコーンが落ちてきていたことは今となってはいい思い出だ。そして映画も終了し、田舎者の私は気合を入れてスターバックスへと向かうわけである。その当時、そもそも喫茶店などにさえ入った記憶のなかった私としては、お店に入り、注文の仕方や内容にとまどったものである。「なんだよトルサイズって、ここ日本だぞ。」今思うとお恥ずかしい限りだ。その関西出身の友人は、自身ありげにキャラメル・フラペチーノの大きめのサイズを注文していた。私も同様に注文し、共に貴重なキャラメル・フラペチーノをちびちび飲み始めたのであった。その味はなかなかのハイクオリティであり、都会の人たちはいつもこんな飲んでるのか、すげーなー、と少し感動した記憶がある。友人も大事に大事にキャラメル・フラペチーノを味わっていた。

友人「やっぱりめっちゃ美味いわ！大切に飲もうっと！」

サイズも大きくその場で飲みきれなかったこともあり、大事なキャラメル・フラペチーノを片手に、ちびちび飲みながら自転車で帰

ることにしたのである。

ところでその友人は、チャットモンチーというバンドが好きだった。その当時リリースされていた曲の中で、「橙」という曲があり、友人はその曲を陽気に歌いながら自転車で帰っていた。その曲のサビの部分ではこんなフレーズがある。

「もうこれ以上行かないで、Please don't go anymore」

そんな曲を歌いながら、キャラメル・フラペチーノを飲みながら、自転車をこぎながら、というながらながらが悪かったのであろう、あれは鹿児島大学郡元キャンパス前あたりを自転車で走っていた時であろうか、友人は相変わらずその歌を歌っていた。

友人「もうこーれいじょーういかないでーぶりーずどんごーえにもっ（がっしゃん!）」

その時、友人は自転車で道の段差を越えた。段差を越えたことで、自転車が多少跳ねたのであろう、「がっしゃん!」という音と共に、友人が片手に持っていた大事な大事なキャラメル・フラペチーノが手から離れ宙を舞い、どこかへ吹っ飛んでいったのであった。

友人「ぶりーずどんごーえにもっ（がっしゃん!）……うおー、どっか行っちゃったよーー！」

歌詞とは裏腹に。

いかがだったでしょうか。過去にしがみつ過ぎるということは、あまり良くないことなのかもしれませんので、昔のお話はこのあたりにおいて、これからはより良い未来のために精進していく所存です。長々とお付き合いいただきまして、誠にありがとうございました。

次号は、鹿児島県立大島病院 消化器内科 児島一成先生のご執筆です。
(編集委員会)